

聖リユーボフの瞳

J・F・C・フラール&ジョージ・ラファロヴィッチ作

1

「お教えください！ おお、お話を聞かせてください！」 大魔術師エルフェノール・ピストウリアト・デ・ラ・ラテイボアジェルは香炉のまわりに胡座をかく弟子たちの言葉に耳を傾けた。師のくちびるは、観念したようなほほ笑みを浮かべた。それから師は二本の人差し指で鼻孔をふさぎ、香炉に息を吹きかけると、言葉をついだ。

「なれば、話を聞かせてしんぜようかの、この知的幼児めらが。よいか、聞きやれ。今は昔、二百と一年前―わしがまだ痩せた三十路の若者でありしころ―わしはたまたま南露西亞に住む恋人同士に出会った。まだほんの少年少女であったのう。しかし二人はそれと知らずになんとも不思議な自己毀損の宗派を率いることとなった。その開山縁起に立ち会った者は、もはやわししか生きておらぬわい。じゃからして、その歴史を語ることで、おぬしらの興味を十六分間以上つなぎとめてみしようぞよ」

室内ははや暗く、巨大な三個の水晶球がランプの光に照らされ、衆目を集める唯一の存在となっていた。最初の水晶球は無色透明、第二の球は薄い紫水晶製、第三の球は豊潤な黄色であった。水晶球のなかでさまざまな世界が回転していた。それからエルフェノールが沈黙を破った。

「二人はまだ少年、少女であった・・・」

「少女はいまだ、」と一同のなかの海王星人がつぶやいた。

だれもほほ笑まなかった。《老人》がすでに話を始めていたからである。

「ペル・イルド・ノメン・ペル・クオド・ソロモ・コンストラインゲバット・ダエモネス・エト・コンクルシト・・・」

しかし、師はここで言葉を切り、サスペンス効果を期待したが、無駄であったとわかった。そこで師は声のリズムに合わせて身振り手振りを入れ、指は中空でなにやら印をこねまわしていた。

2

「少年の出番はあとじゃ。まず、おぬしらは、少女がいかに美しかったかを理解しておけよ。甘き紅唇、三日月匂う蛾眉、沈魚落雁閉月羞花といった美しさ、細腰の姿は窈窕嬋娟、その魂は天仙も心

動かす璧玉じゃった。なかんづく少女の瞳は優渥慈愛、純粹無垢、あたかもカララ大理石の結晶に滴る玻璃の滴、眼差しの向かうところは聖となるという代物じゃ。いかなる清流よりも清く、いかな王侯の紫水晶よりも美麗、冥土の四隅の闇を照らし、蒼穹の星の如く輝く瞳なのじゃ。これほどの瞳とて、しかしその背後の魂を映し出すには不完全な鏡じゃった。これが齡十歳の別嬪お嬢ちゃんリューボフじゃ。

後代、例によって彼女の周囲に伝説が生じるようになると、いろんな話が出てきておる。嚴寒のさなか、村に餓狼の大群が襲来し、二頭の牛を貪っておったとき、たまたまリューボフが通りがかったそう。そして一時間半後、二百頭の餓狼が彼女の手を嘗めようと押し合いへしあいしている姿が発見されたとき。

別の折には、泥酔した教皇が農夫相手に口汚く罵っておったとき、リューボフから放たれた視線のために、舌がもつれたという。これなどは尋常ならざる奇跡じゃろう。

もちろん彼女は村じゅうの人気者じゃった。村人の魂は素朴にして《自然》に近いのじゃから、彼女の地位がよくわかったのじゃな。じゃが、リューボフが崇拜されたり同い年の子供たちに課せられる仕事を免除されていたといっておるのではないぞ。遊び友だちが彼女の美点をわかっておったというものでもない。いわゆる奇跡や報告された治癒例は、彼女の没後十年ほどたってから語られておる。

そのころには生き証人はすべてこの世を去っておったのじゃ。もちろん、それでも、大いに有り得る話じゃ。大いに有り得る。

3

「よいか、この鼻たれ餓鬼どもめ、おぬしらは魂売買人という露西亞の民話を読むか聞かしておろう。ああいった連中が露西亞にもおるのじゃ。そういった男が一人おると思え。ただし露西亞の魂は仕入れ価格がずっと安く、しかももっと物理的実体を伴っておるのじゃが。

さてこの男、魂売買人じゃぞ、この男は町から村へと、目の形をした宝ものを捜し回っておった。男の商売道具は、内側にエナメルを塗った胡桃の殻数個、それにある種の魔法の液体じゃ。液体のほうは、仕入れた品の品質と鮮度と美観を保つのに使う。

男はリユーボフが住む村に到着してから二日目に、リユーボフの美しさに気がついた。男はとある裕福な婦人の持ち家に賓客として泊まっておったのじゃが、ともかくも根城に引き上げ、それから数時間もリユーボフの素晴らしい宝物をいたたく夢を見て、よだれを垂らしておった。男は慎重に策をめぐらした。まず子供たちすべてと中良くなった。それから七日目、男はリユーボフと偶然に――少女

はそう思っていた―村はずれで出会い、しょうもない装飾品をただでくれてやった。それから男は自分の両目に胡桃の殻をつけ、かくれんぼの類いをやるふりをした。

数分後、今度はリユーボフが目隠しをする番になった。しかし、その目隠しは男がつけたものとはちがっておった。男はそれをリユーボフの眉毛の下にくっつけた！

リユーボフは痛くなかった。どちらかというところ、摩訶不思議な“いい気持ち”、フランス的な肉体的倦怠感を感じたのじゃ。しかし、なんとしたことか、数分後、太陽も月も星も、リユーボフには失われておった。胡桃の殻の中の力が彼女の目を引っこ抜いておったのじゃ。

男は宝の入った小箱を抱えて逃げ去った。それっきり、男の話は近辺でちらとも聞かれなくなった。

4

「哀れな幼いリユーボフが、盲目の身に慣れるまで、どれほど恐ろしい暗黒の日々を過ごしたか、長い話じゃから省略しよう。わしは医学哲学者ではないわい。家庭と安らぎの話がはるかに性に合つとる。わしは旅をするときは、豪勢に旅をするんじゃ。お供には医者も哲学者もまじっておる。だからじゃ、わしが子供や人間の悲しみの深さを考えたところで、どうなるつちゆうんじゃ？ それを解

明するために脳みそふりしぼって、なにが面白いちゅうんじゃ？ 内省的一個人のままでおったほうがずっと快適じゃろう。そういうわけで、おいそのメキシコの牧童、ペヨーテの袋をくれい。すこしばかし驚異の幻覚薬と根っこをくれんかの。そうすれば考えもせず、疲れもせず、ものが見えるのじゃがのう。

やれやれ、話はどこまでじゃったかの。教えてくれや、わが卑小なる兄弟たちよ、ラルヴァの父親たちよ、雌山羊の息子たちよ。ああ、思い出した。さてさて、哀れな幼いリユーボフは、その雄々しい魂によって絶望から救われた。最初はみじめじゃったが、のちには諦観して生きるようになったのじゃ。

さて、ここで少年が登場する。彼は元軍人のもとに全盲児として生まれておった。そして父親が奇矯というか、とにかく人付き合いの悪いやつで、そのため息子は村人にほとんど目もかけてもらえなかったのじゃ。しかし、この子はけっしてつまらぬ少年ではなく、心は広がった。

リユーボフは、自分の災難を説明して憐憫に甘んじようなど、思っていなかった。どうして両の瞳が失われたのか、誰も聞いたことがなかった。数カ月もたつと、彼女がかつてどれほどの少女であったか、すべて忘れられてしまった。男も女も子供たちも、彼女のわきを通りすぎ、気づきもしなくなつたのじゃ。両親はやさしかつたが、仕事が忙しくて、彼女をかまっていられなかった。ただひとり、あの全盲児ピョートルだけが、リユーボフの美しさを理解した。彼にはものを見る目がなかったが、

それゆえにほかの感覚が鋭かったわけじゃな。最初のころ、どうしてこの世に自分だけが—なにせ無学な農夫の倅じゃから、こう思う—主のくださる五感を授からなかったのか、ピョートルにはどうしても理解できなかった。ところでこの村の助祭は、その昔いろいろあつたらしく、人に睨まれることにかけては天才とまでいえる人物で、年寄り連にいわせると“実にござかしい”男なのじゃが、これがあるとき幼いピョートルに、盲目の意味を教えてやった。このとき助祭はその代償の話もした。この子の精神的平衡には幸甚じゃったといえよう。

『いいかい、ほかの人がぼうやのことを盲目だというとき、それはぼうやの目が見えないということなんだ』と助祭は言った。『つまり、ぼうやの目は悪魔がくれたものであつて、神様からの授かりものじゃない。ぼうやのお父さんが悪人だつたつてことは知ってるだろう。女の人が歌つて踊つているとき、耳をくださるのは神様なんだ。もしその音が楽しくないなら、耳は悪魔にもらつたものだよ。神様がわたしたちのために露西亞語で書いてくださつた聖書にはこう書いてある。“彼らは耳を持っているが、聞こうとしない”とね。だが、ぼうやは耳はよく聞こえるし、鼻もきく。ほかの二つの感覚も大丈夫だ。ぼうやに欠けているものは、物事の色だ。わたしはそれをぼうやに説明することができないし、説明してもぼうやのためにならないだろう。ぼうやの救いは、醜いものを見なくてすむことだ。たとえば、イワン・セミヨノヴィツチみたいに醜いじじいを。それに、ぼうやの聴覚、触覚、嗅覚はわたしたちよりずっといい。もちろん、見ることができればなおいいから、わたしがぼうやのためにキリスト様に祈つてあげよう。蠟燭を買うために銅貨を少しくれたら、特別のお祈りをしてあげるよ。たくさん持つてこなくちゃいけないよ。みんなぼうやにたっぷり恵んでくれてるだろう?』

かくしてこの退屈な野獣は教会で飲んだくれる数少ないチャンスをものにするわけじゃ。

幸いなことに、ピョートルとリユーボフはお互いにもっと簡単に自然な理論を教えあつた。このときリユーボフは十二歳、ピョートルは十四歳じゃつた。そしてこのわしは、たまたま近所に滞在しておつた。わしが二人に会つたのは、二人は手に手を取り合い、用心しながら道を渡り、わしが瞑想しておつた場所に近いてきたときじゃつた。リユーボフのほうとは事故のまえに会つておつたのじゃが、黄金の鈴を振るような声を聞くまでは、それとわからんじゃつた。わしは二人の子供っぽいおしゃべりに耳を傾け、それから混ぜてもらい、彼女の口からすべてを聞いたのじゃ。その後、数日たつてから、あることが起きた。ここで一人の貴婦人が登場する」

そこでエルフェノールは言葉を切つた。外側から扉がはげしくゆさぶられたからである。

「お入り」と師は言った。

扉は押し開かれ、再び閉まつたが、だれも入つてこなかつた。弟子たちはおもしろそうに視線を交換していた。一人が口を開いた。

「貴婦人が入つてきたのですか？」

この適宜にかなった海王星精神の発露で全員がどっと笑った。しかしエルフェノール・ピストウリアトは、仏蘭西南部人のように、人生の礼儀を逸してしまい、十二名の若者を罵りはじめた。師は怒りっぽい性格であり、しかも非常に芝居がかった性格でもあった。

師は立ち上がり、全員を笑わせた責任者のもとへつかつかと歩いていった。

「貴殿の正体見たり」とエルフェノールの顔を朱に染めて言った。「貴殿の正体見たり、この不潔な猿め。お前の父親は豚肉腸詰と燻製肉の小売商だった、豚業者めが。ならば貴殿の口についてでるものが豚の如き呻き声であつたとして、なんの不思議があるうか」

師はすでに血を沸騰させていて、前述の発言は単なる蒸気の予備的発生にすぎなかつたのである。彼は闇のなかを歩き、部屋の一番禺にある巨大な戸棚に向かつた。引き出しから十二個の小さな蠟人形を取り出すと、それを小卓の上に立てた。師は早口で呪詛調伏をつぶやいた。続いて暖炉に向かい、真つ赤に焼けた火搔き棒を手にすると、小卓に戻つた。

十二名の弟子たちはなにか起こりそうだと思つたが、なにが起きるかはわからなかつた。恐るべき予感が彼らの意志を圧倒した。誰も動けなかつた。突如、十二名が飛び上がり、床に転げ回り、強烈な苦痛に咆哮しつつ身をよじらせた。全員がびっしり冷や汗をかき、肉体が《火》にさいなまれていた。小卓のところでは、老師が彼らを罵りながら、蠟人形をあたりかまわず焼けた火搔き棒でひっぱたいている。しかし師はえこ贖なく、全員を平等にひっぱたいていた。黄色に塗られた床を十

二名がのたうつさまは見るにおどましい光景であった。師はかまうことなく、ひとりひとりの名前を呼んでは、その名に対応する蠟人形を打擲していた。

ついに灼熱の火掻き棒もふたたび冷えて黒くなった。また、エルフェノールの腕も疲れてきたのである。師は蠟人形をすべてかき集め、大きな水盤に放りこんだ。浮かびあがってくるやつは何度も何度も沈めていた。

師の餌食たちは徐々に五感を取り戻していった。師はふたたび蠟人形をかき集め、戸棚にしまった。それから弟子たちに向かって叫んだ。

「座りおろう、この不逞の輩どもが。逆境とはいかなるものか、身に染みたかや、それともまだ懲りぬかや？ 二度とふたたび差し出口を申すでないぞ。このさき扉を叩く者がおれば、おぬしら全員破門じゃわい」

弟子たちは全員興奮に身を震わせていた。怒りも相当なものであったが、老師が披露した力への欲望もまた大きかった。エルフェノールは石炭と香に息を吹きかけ、三個の水晶球を照らしていた洋灯を消した。そのため一同はほぼ真つ暗闇のなかにいた。老師は話を再開した。

「さて舞台に登場しつつある貴婦人は、今一步で偉大なるヒステリーのタルノウシユカ伯爵夫人になりかねない御仁じゃった。彼女の肉体の虜になった情夫は数知れず、しかもそやつらを飲酒に走ら

せるのが趣味という女性なのじゃーそやつらに殺人を犯させるのも朝飯前じゃつたろうが、さすがに彼女もそこまではしておらん。たんに数名を自殺に追い込み、また数名に自尊心を失わせさえした程度じゃ。《瞳》を盗んだ男もそういった手合いの一人じゃつた。

いちいち語っておつても限がないから、簡単に済ませれば、目という宝石を集めておつたこの誇り高い蒐集者は、貴婦人に一對の豪華な耳飾りを贈呈したのじゃーなにを隠そう黄金の台座に嵌められた幼いリユーボフの両眼じゃ。その貴婦人が村の外れの別荘に滞在していたおり、この耳飾りを着用しておつた。素朴な農夫たちは噂したものじゃ。農夫たちはその両眼を、青金石に似た高価な宝石と間違えた。農夫のひとり、貴婦人との会見の様子を語っていたとき、哀れな盲目のピョートルは熱心に聞いていた。

わが友よ、耳をくれーいや、耳を貸せ。極めて重要な情報を教えてくれよう。ちよつとした心理学でもあるぞよ。他人のことを語る男はおもしろくもなんともないが、そいつをおだてて自分の経験談をさせてみると、これは聞くに値するのじゃ（賭けてもよいぞ）。

貴婦人に出会つた男はかく語りき。いつもはとても退屈な男なのじゃ。しかしこやつは貴婦人に出会うまで、生まれて一度も面白い経験をしたことがなかった。貴婦人は庭園を歩いておつたそうなの。食卓のための花を摘んでいたとき、この百姓が穴を掘っておるのを見て、声をかけた。

『穴掘りが終われば、わらわに花をきつてくりやれ』と彼女は言った。

すると男は必死で働き、体は実に精密機械のごとく作動するので、若さと美に溢れだした。貴婦人は男に視線を飛ばし、考えた……ほどなく彼は穴掘りを終え、花を切つてやったが、そのあいだ一度も貴婦人から視線をそらすことがなかった。男はすでに奇妙な新しい感覚を覚えていて、抑制のきかぬシユクシユマープラナヤーマに汗を流しておつた。

あわれなるかな、皆の衆！ 貧しい無学な農夫が眺めるには、あまりにすばらしい貴婦人じゃつた。おかげで彼女は農夫の生涯最後の日まで聖なる幻影としてとどまることになった。この百姓が《われらの公主へカテ》を知つておつたなら（公主の御名を畏怖のうちにつぶやく者に幸いあれ！ 公主の慈愛の眼差しがわれらの上に降り注がれんことを！）、その幻影を偉大なる女神の訪臨と思つたであらう（公主の御名はわれら敬愛する兄弟☆◎のカドシユ騎士の《地下納骨所》にて早口につぶやかれん！）

われらの献酒の時刻も近づきつつある。ゆえに話を切り詰めるぞよ。ようするに、農夫は貴婦人の声を聞いたわけじゃ。貴婦人は謝辞を述べ——自分の奴隷である貧しい農夫にじゃぞ——その場を去つていった。しかし貴婦人の姿は農夫の目にくつきり焼き付いていた。貴婦人を描写するとき、彼はみごとにやつてのけた。

さて、幼いピョートルはすべてを聞いていた。全世界に愛する女はたった一人しかいなかった。ほかの女の描写を聞いても、彼はまったく無頓着だった。ただ、貴婦人の素晴らしい宝石のことが言及されたとき、彼は耳をそばだてた。

『耳飾りってなんだい？』少し後、ピョートルはリユーボフの手を握りながら尋ねた。

『それはきれいなものの、ピョートル』と彼女は答えた。『見ると、とってもきれいなもの』

『ふーん』と彼は溜め息をついた―彼にはよくわからないことのひとつじやったからじゃ。

『なかに火や水が入っている石なのよ』

『へえ、燃えるのかい？ 触ると冷たいのかい？』

『目にそう見えるだけよ。あたしは覚えているわ。黄金の台座に嵌められていて、耳のところの下げるの。首の回りでもいいわ』

『リユーボフ、そんなのを感じてみたいかい？』

『ええ！・・・でも、むだね。あたしは見えないもの』

『その上に指をすべらせて、それがどんなふうに・・・その、見えるか、想像するつてのはどうだい？』

『それならできると思う。そしたら、それがどんなものか、もっとうまく説明してあげられるわ』

ピョートルはふたたび溜め息をつき、すぐに彼女のもとを去ったのじゃ。その晩、彼は貴婦人が滞在している屋敷のまわりを徘徊しておった。貴婦人は庭園を散歩しながら、ひとりで歌をうたっていた。ピョートルはその声に聴き入った。ほどなく貴婦人はすわった。

ピョートルは目を使わずに目指す方向に歩くことに慣れていたから、なんとか貴婦人の背後に忍びよることができた。ある固定観念が彼の子供じみた頭脳を占拠していた。誰もが美しいと認める宝石を手にいれ、リユーボフのもとに持って行ってやろう、とな。

突然彼は前方に飛び出し、闇のなかで耳を求めて手を伸ばした。貴婦人が振り向いたとき、かすかな音がした。それで彼は場所を特定できた。彼の両手が貴婦人の両耳にかかり、乱暴に引っ張った。貴婦人は一言も発さずに昏倒してしまった。あまりに突然の激痛だったからじゃ。

ピョートルはゆっくりと逃げていった。手には人肉の欠片がこびりついた二個の耳飾りを握り締めおった。

ピョートルはリユーボフをさがしておった。リユーボフのほうは、エサイの伴が放った石ころのごとく、なにせ目で見て判断することをしないじやから、バジリスクの巢に手を伸ばすこともできるし、雀蜂の穴で遊ぶこともできる。それでいて悲しみなど覚えたことがない少女であったのに、このときばかりは、良からぬことが起きそうだと震えておった。リユーボフはふと気づいた。それまで歩いておった暗い小道から、歩きやすい広い道に変わる地点に到達しつつあるのではないか、そういう予感がしたのじやな。ピョートルがやってきたとき、わしは木陰に隠れておった。そして二人の会うさまを目撃したのじや。

ピョートルもまた、興奮に身を震えわせておった。被害者の血で少々汚れていた手をこすりながら、彼は喘ぎながらこう言った。

『リユーボフ、リユーボフ、すてきな宝石をふたつ持ってきてあげたよ。さわってごらん』

しかし彼女が手を出したとき、彼は手を引っ込めた。それから本能的に二個の耳飾りを袖口でこすった。この過程に於いて人肉の欠片は剥落した。

それからピョートルはリューボフに一步近づき、肩に手をかけ、耳飾りのひとつを所定の位置に装着してやろうと一生懸命じゃった。しかし彼の手は震えておった。彼女のほうもじっとしていられた。二人は大いなる神経的興奮のなかで難儀しておった」

「わしとしては」とエルフェノールが続けた。「事の顛末を語るには想像力を駆使するしかないわい。おぬしら一同、そのような高等手段は知るまいが。また、いかにわしとて、理性の引き出しを総ざらいにしたところで、あの極めて希有な現象に説明をつけられるとも思えん。面倒じゃからやる気も起きぬ。

簡潔に言うともっと有益な作業に従事すべき時刻が迫っておるから、簡潔にいくぞよーピョートルの手は余りに震えておったため、リューボフのかわいい耳たぶに触りそこなつたのじゃ。彼女の顔に差し出されていた宝石は、かわりに空っぽの眼穿に触れてしもうた。

覚えておるかやあの男、眼球を買ったり盗んだりしておった悪党は、実際きちんと仕事をやっておつたのじゃ。リューボフは、差し出されたものを見ようと無益な試みをしていて、眉毛のしたの暗いくぼみを大きく開いておつたからじゃ。ふむ、わしとしては、おそらく眼球がまだ生きておつた視神経に接触したと思うておる。とにかく、眼球が触れるやいなや、彼女は驚きの声を発したのじゃ。

『見える！ ピョートル、見えるわ！ 見えるわ！』

そして彼女は、もう自分の世話ができるので、急いで眼球を黄金の台座から外し、元来それらがあ
るべき場所に押し込んだのじゃ。これぞ奇跡のなかの奇跡じゃな！ リューボフはわしらと同様、も
のが見えるようになったのじゃ。彼女は哀れな幼いピョートルを目の前に見た。彼はあつけにとられ
ながらも、リューボフの興奮をともにわかちあっておった。

リューボフは彼の手をとり、額にキスした。それから彼女は長いあいだ泣いておったが、ようやく
彼の横にすわると、自分が得た新しい感覚の話をしてやった。

6

しかし、その新しい感覚は満足のいくものではなかったのじゃ。彼女が見た空は、お星様こそ輝い
ておるが、以前に考えておったほど美しくなかったわけじゃ。幼い友人のかわいい顔とて、彼女が幼
心に空想していたほどかわいくなかった。そういうわけで、彼女は尋常ならざる心配りを見せながら、
自分の得た幻滅を語ったのじゃ。

『ああ！ 考えていたころのほうはずっと美しかったのよ、ピョートルーシユカ！』と彼女は叫ん
だ。

そして衝動に駆られたリユーボフは、両眼を掌に落とすと、溜め息もつかずに背後に投げ捨てた。

わしはそれを拾うたぞよ、同輩よ。一方、二人の子供は腕をからめあってその場に立ちつくしてあった。悲しげな、しかし悟りきった表情がゆつくりと二人の顔に浮かんできた。

さよう、わしはそれを拾ったのじゃ。しかしおぬしらには見せてやらんぞ、この身の程知らずの狐どもめが。

さて、明かりをつけてくれんかの・・・儀式を始めよう。H兄弟、聖なる杯を満たせ・・・喜びの灯は聖なるかな！ 悲しみの灯は聖なるかな！ われら不断の知識の聖櫃に入らん！」

7

その後少したって、弟子の一人が老師に質問を發した。

「お師匠様、奇怪な自己毀損の宗派のお話をされておられたでしょう。その宗派はどういうものでしょう？」

「どういふものでしょう、じゃと？」エルフェノールは繰り返した。「そうさな、そやつらは、リユーボフの言葉に耳を傾け、字句通りに受け取った連中なのじゃ——つまり、目がなければより良い世界が見えると思つたのじゃ。そやつらは、それを実行し、すぐに信者も勢揃いした。そやつらはまず自分の目をつぶした。子供が生まれると、揺り籠のなかで目をつぶした。その通り、すぐに何百人もの人間が、このようにして主なる神を崇拜するようになった。そしてリユーボフとピョートルはそやつらの牧師となつた。おぬしが知りたいのはこれだけかや？」

「お師匠、貴婦人はどうなりました？」

「貴婦人？ はっ！ それつきりじゃ。露西亞では、あの程度のことでは裁判にならぬわい。耳の傷を、真珠と黄金の分厚い宝飾品で隠しただけじゃ。それもまた一興じゃろうが！ それに、あの女がおぬしになんの関係があるというのじゃ、この雄山羊めが！」

「さてと、おぬしら全員、そろそろ引き上げんかい。部屋に戻るときはみちみち真言を唱えながらいくのじゃぞ」

(完)